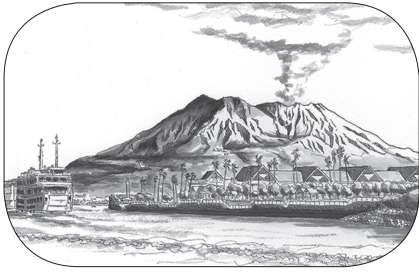


鹿児島県の教育



巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会長

鹿児島市立清水中学校長
中山 恭平

「感動の教育」 「コロナを乗り越えた学校のめざすところ」

今年の桜の開花は、全国的に随分早かったようだ。それと歩調を合わせてくれているかのように、新型コロナウイルス感染症が終息の方向に向かっていくことを皆さんとともに喜びたい。

思えば、新学習指導要領の基本的な考え方の「社会の変化は予測しがたいが、どのような状況にあっても、子どもが自ら考えて、判断して、行動できる」かが、学校にいきなり問われたこの三年半の新型コロナウイルスとの戦いだったように思う。大苦戦は強いられしたが、全国・全県下の仲間と情報を交換しながら乗り越え、子どもたちの笑顔と歓声が学校に戻ってきたことが心から嬉しい。

ただ、今の学校はコロナ禍前に戻っただけではない。例えば、これまでの感染症対策やICTの活用等の指導方法の工夫・改善は飛躍的に進んだように思う。また、この苦難をともに乗り越えてきた子どもたちや職員の間人的な成長に感動することも多かった。コロナ禍を乗り越えた学校で、さらに、感動の教育が展開されてほしい。

子どもたちの「生きる力」を育てるために、必要なことのひとつが「感動」だと思っている。しかし、子どもたちの体験や感動の機会は激減してきている。ある会で、日の出・日の入りを見たことのない子どもが増えていると聞いてびつくりした。私が育った奄美大島大和村戸円は、夕日の美しいところで古人が奄美十景と称えている。東シナ海に沈む夕日に、自然の悠久さや人の生のはかなさなどいろいろなことを思ったものである。まさに感動体験である。そして、それはふるさと体験とも言える。そのような感動は、人間性の根幹を形づくるのではないかとも思う。

また、感動的とまではいえないかもしれないが、学校生活では心を動かされる出来事が多い。その生活の中で繰り返される小さな感動が子どもたちの生きる力を育んでいくのだと思う。

明日から、子どもたちの感動場面をどうすれば増やせるか考えたい。そして、子どもたちの感動体験を目の当たりにして感動する教師集団を育てたいと思う。

令和5(2023)年 6月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	専門部だより	19
心に残るひとこと	9	一般財県校長会館だより	20
ある日の校長講話	11	編集後記	20



令和の日本型PTAを目指して

NPO法人SCC 理事長 太田 敬介

PTAは終戦直後の昭和二十二年、文部省(当時)が「父母と先生の会」教育民主化のために「I」というPTA結成の手引書を全国都道府県知事宛てに送付をしたことがきっかけとなり、全国各地で急速に組織化されていった。翌二十三年には既に全国の小・中学校の七割にPTAが設立されたとあり、戦後復興の最中、当時のPTAに寄せる期待、熱量はたいへん大きいものだったに違いない。

こうして誕生したPTAは、みんなで力を合わせていく体制を整えるために、様々なことを民主的にルールや役割分担として形作っていった。それが今に残る会則や役員選出、学級PTA、専門部活動等につながるわけだが、得てして、こういったことは、時間が経てば経つほど、何故そのようなルールができたのかという部分は忘れ去られ、ルールを守ることだけが目的化してしまう。御家庭の中で、子どもたちのお手伝いのルールを決めた途端、「今日は誰の番だっけ」とか「〇〇がやっていないからズルい」といったケンカの種になってしまふのと同じで、つまり、みんなが納得して望んで決めたこと(WANT)が、やらないといけないこと(MUST)になった途端、やりたくないこと(Do not WANT)になってしまうのである。

従って、ルールというものは「やりたくないこと」になり下がらないために、常に見直すことが求められるが、残念ながら、一年でクルクル人が変わってしまうPTAはこの機能が働きにくい。そうしてPTAは長い年月とともに「やりたくないこと」になってしまい、今や、その負担感を減らすことがPTA改革として勇壮に語られることが増えている。しかし、必要なことは、そもそもWANTは何だったのか、その目的を達成するためにどうあるべきか、語り合う場を増やすことではないだろうか。みんなが「そうだよな」と思える組織づくりには、丁寧な対話とコミュニケーションが欠かせない。それら本質を伴わないPTA改革は、コミュニケーションの質と量を下げ、PTAをますます不要な組織へと導いてしまう。

子育て、家庭教育の悩み・心配は尽きることはない。そんな親たちが集い、苦勞を共感し、互いを認め、子育てが孤育てにならないよう、温かくつながる。それが家庭教育の充実につながり、更に学校教育との連携を深めることで、教育全体の質が向上し、子どもたちの豊かな教育環境を創っていく、それがPTAが担ってきた大変重要な普遍的な役割である。

PTAは「負担」ではなく、一人一人の居場所づくり、つながりづくり。PTA活動を通して

総合型地域スポーツクラブNPO法人
SCC (スポーツ・コミュニケーション・
サークル) 理事長
二〇一〇年〜 単位PTAに携わる
(元玉江小学校PTA会長・
元鹿児島南高校PTA会長)
二〇一八年〜 鹿児島県PTA連合会会長

て、寛容さをもち、お互いの立場を受け入れ、認め合い、支え合う。仲間がいる、社会とつながっているという安心感が「PTAに参加してよかった」となり、また参加しようという思いにつながる。時に助け、時に助けられ、みんなでありがとうを言ったり、言われたり。それらを通じて一人でも多くの人がPTA活動への理解が深まっていくこと、それがわたしたち大人の変化であり、生涯学習であり、社会教育団体であるPTAが目指す姿ではないだろうか。

令和三年一月、中央教育審議会が取りまとめた答申のタイトル「令和の日本型学校教育の構築を目指して」全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」。これを見た瞬間、これはまさしくPTAにもピッタリと当てはまるメッセージだと感じた。これまでみんなで一緒にやってきた協働的なPTAの良さを残しつつ、これからは関わり方の多様性を認める個別最適なPTA。つまりPTAも、協働的かつ個別最適な「令和の日本型PTA」を目指す転換期にあるのではないか。学校が目指す理想とする学校教育の姿、PTAが目指す理想とする社会教育の姿は重なり合う。まさにベクトルを合わせ、豊かな教育環境を創造していきたい。



自己有用感に裏付けられた 自尊感情の育成を通して

潤ヶ野小(隅) 川久保 浩 史

児童の自尊感情をいかに高めていくかということが課題となつて久しい。各学校では、児童の良い面や行動を認め合うような取組、児童への肯定的な声かけの工夫などがなされ、いろいろな成果を出されていることと思う。一方で、自尊感情を高める指導について、その進め方によつては根拠のない自信や自分がよければそれでよいというような独りよがりな考え方につながつてしまうことも危惧される。

文部科学省国立教育政策研究所の生徒指導リーフレットには、「他者の存在を前提としない自己評価は、社会性に結びつくとは限らず、自己有用感(他人の役に立った、他人に喜んでもらえたなど相手の存在なしでは生まれてこない感情)に裏付けられた自尊感情が大切である。」と記されている。そこで、学校全体として、児童にどのように働きかけていけば、自己有用感に裏付けられた自尊感情の育成ができるのか考え、実践していることを一つの提案として述べたい。

勤務校は自然豊かな地域にあり、児童は少数で落ち着いた雰囲気の中で学校生活を楽しく過ごしている。昨年度までのキャッチフレーズは「自然がいっぱい、笑顔がいっぱいチャレンジ潤小」である。

本年度は、このキャッチフレーズの中に、「『ありがとう』がいっぱい」というフレーズを付け加えることとした。このフレーズには、二つの意味を込めている。一つは、一般的な感謝の気持ちを持つことの大切さを示すものである。そして、もう一つは、利他の精神や社会性、自己有用感の育成へとつながる「ありがとう」がいっぱいの学校にしようという意味である。年度当初にキャッチフレーズを示しながら、児童に、「今年度は、誰かに『ありがとう』と言われるようなことを意識して行動してみよう。」という話をした。自己有用感に裏付けられた自尊感情を高めるといふ意味で、児童に利他の精神や誰かに共感し、社会的な働きかけを行うことの大切さをわかりやすい言葉で伝えたいと考えたのである。そして、このことについては、職員や保護者に学校経営方針を伝える際にも具体的に説明し、共通理解を図つた。

いこうとする態度や他者を思いやる心へつながつていくと考えている。今後も「感謝すること」の価値・「感謝されること」の価値という二つの観点から指導を進めたい。

また、これまで述べてきた考え方は、職員の自尊感情の高まりやよりよい関係づくり、そして、働きがいにもつながるのではないかと考えている。

スタンフォード大学オンラインスクール校長の星友啓氏はソシオメーター(社会性のあるさし)理論の中で、「これまでのポジティブ心理学の成果が明かした最も効果的な方法は、利他的なマインドを持つこと。相手を利する優しい心を持ち親切な行動を取ることで、『ソシオメーター』値が上がり、自己肯定感につながるのです。」と述べている。

まずは、管理職自ら職員へ共感的・支援的な働きかけを積極的に行つたり、感謝の気持ちを言葉で表したりしたい。その上で、職員がお互いに思いやり、困っている時などに手を差し伸べたり感謝し合つたりするような雰囲気や場ができるように働きかけることもより一層大切にしたい。つまり、職員の中にも「『ありがとう』がいっぱい」の具現化を図りたい。そして、このような取組が職員一人一人の仕事の充実感や意欲の高まり、そして学校の組織力向上へとつながることを期待している。

児童も職員も、自尊感情を高め、お互いに尊重し、相手を思いやり、助け合いながら、毎日笑顔で過ごせる学校づくりを目指していきたい。

引用「全米トップ校が教える自己肯定感の育て方」 星 友啓 著



地域に愛され応援される学校を目指して

出水商業 竹之下 純 與

本校は今年で創立七十六年目を迎える出水市立の高等学校である。昭和二十三年、米ノ津町立米ノ津高等専修学院として設立され、当時米ノ津中学校舎の一部を借り、建築科及び家庭科から始まったと記録されている。翌年には、米ノ津高等実業学校と校名変更、同時に商業科が新設されており、その翌年には農業科が新設されるなど、町立の高校として、地元の現状、要望に応える形での紆余曲折のスタートであったことが窺える。昭和二十九年に出水市立出水商業高等学校となり、学科再編を繰り返し、昭和六十三年の情報処理科新設後は、商業科、情報処理科の二学科となり現在に至っている。

この七十六年の歴史の中で、燦然と輝く出来事が記録されている。昭和三十五年、野球部の甲子園出場である。野球の盛んな土地柄もあり、市立高校の甲子園出場の快挙に、当時の盛り上がりは大変なものであったと伝えられている。現在に至っても、地元の方々にとっては、本校の最も輝かしい歴史であり、市役所ロビーに当時のエースピッチャーの写真が掲示されているなど、今なお地元を誇りとされている。

そのように市立の学校として、地元の方々とともに歩んできた本校が、今後も、更に地域に

愛され続ける学校として何が必要であるか、考えていることを述べたいと思う。

一 挨拶が丁寧な学校

丁寧な挨拶を心掛けることは、人間関係づくりの基本であり、最も大切なことである。校内において、職員、生徒が互いに丁寧な挨拶を心掛け、来客への挨拶、校外における挨拶なども丁寧に行うことで、地域の方々との人間関係が醸成されると考える。本校商業教育の中の接遇教育とも重なる「挨拶が丁寧な学校」づくりを推進していきたい。

二 仲が良く、信頼し合える学校

固い絆や友情、愛情は、一人一人の成長、また学校全体の飛躍、成長には欠かせない要素の一つである。職員と生徒、また生徒同士、職員同士がお互いに理解し合い、尊重し合う学校づくりを目指し、周囲から「仲が良く、信頼し合っている一枚岩の学校」と認識していただけるような学校づくりを推進していきたい。

三 地域に根差した学校

出水商業デパートは今年で二十六回目を数える地域の方々にとっても楽しみな、本校の代表的地域との交流行事である。その他、地

元企業との商品開発、地域行事への参加、ボランティア活動への参加など、更に交流を深め、「地域に根差した学校」づくりを推進していきたい。

四 挑戦し続ける学校

学習、部活動、進路実現などの成果をあげるためには、生徒、職員が、本校の伝統継承と同時に、新しい取組に挑戦し続ける精神を持つことが大切である。一生懸命に挑戦する姿が、地域の方々に元気をもたらす。そのような「挑戦し続ける学校」づくりを推進していきたい。

五 満足感で溢れる学校づくり

生徒、保護者、また職員一人一人が、本校を誇りに思い、学校生活にやりがいと満足感を持って日々を送ることこそ、本校教育の一番の目標である。多くの「満足感で溢れる学校」づくりを目指し、笑顔の絶えない、生き生きとした学校活動を推進していき、結果として、地域の方々の学校に対する親近感、信頼感、満足感にまで繋がるよう努めていきたい。

以上のことを柱として、これからも地域とともにあり続ける出水商業高校でありたい。今の時代、広報等による周知活動も必要なことであるが、学校が為すべきことを為し、その様子を地域の方々が感じ取り、高い評価をいただくことこそが真の信頼される学校であると考えられる。これからも地域に愛され、応援される学校であるために、生徒、保護者、職員が力を合わせ、地域の方々と結び付きを大切にしながら、一歩ずつ歩んで行きたい。



一人一人を大切にしたい

「魅力ある学校」を目指して

亀山小(北) 吉 永 秀 和

一 はじめに

川内川の太平橋から河口に沿って、その右岸に広がる地域が亀山小学校区である。学校周辺は豊かな自然に囲まれ、新田神社をはじめ、可愛山陵、若宮古墳など由緒ある史跡等が数多くあり文化的にも恵まれた環境にある。

本校区は、山本實彦をはじめ幾多のすぐれた人材を輩出した地域であり、校区の人々々、その輝かしい歴史と伝統に誇りを持ち、「百難克服」と進取の精神で地域づくりに取り組んでおり、学校教育に対しても関心が高く、協力的である。

二 学校経営の基本方針

学校教育目標は、「確かな学力と思いやりの心をもった、心身ともにたくましく生きるかめやまの子を育てる」である。本校を含めた川内北中学校区は、国立教育政策研究所の「魅力ある学校づくり」調査研究事業に取り組んできた。本年度からその後継事業となる「こともの発達を支える生徒指導に関する調査研究事業」に取り組んでいるが、本校では、「みんなで何かをするのは楽しい」の視点を大切にしたい学校づくりを進めている。

三 目標実現に向けた具体策

(一) 魅力ある学校づくりの推進

子供にとって、学校は安心・安全な場所
でなければならぬ。教職員が子供の声に

共感的に傾聴し、一人一人の実態に応じた声かけや支援を行う「居場所づくり」、学級活動や学校行事等を通して子供たちが互いのつながりや自己有用感を実感する「絆づくり」に取り組んでいる。昨年度「体力アップ! チャレンジかごしま」で学校賞を二年連続受賞したことが自信となり、三年連続を目指し、全学級でその取組が始まったところである。

学力向上は本校の課題の一つであるが、本年度の研修テーマである「魅力ある学校づくりを通して自己有用感の育成」に向け、魅力ある授業を目指した学習指導の工夫や自己有用感を高めるための話合いの場の工夫に努めているところである。これまでの研修の成果を生かしながら、学習意欲の持続、ロイロノート等ICTの効果的な活用と自己決定の場の設定による対話的で深い学びの実現、他の学びの振り返り等により「みんなで学ぶ楽しさ」を味わえるような学びの在り方について研究している。

(二) 人権教育の推進

本年度、「子供の人権プロジェクト推進校」を希望した理由は、魅力ある学校づくりを進める上で最も大切なことは人権教育の充実であると捉え、より深く人権教育を推進したかったからである。人権教育のテーマを「子供たちの自己有用感を高める人

権教育の推進」魅力ある学校づくりを目指して」とし、人権意識・人権感覚を高める教育活動を展開している。「気づく目・感じる心・考える頭」をキャッチフレーズとし、培った人権感覚を様々な場面で発揮し、自他の良さを認め合える環境づくりを進めているところである。学校での取組を家庭や地域にも広げられるよう、PTA総会や家庭教育学級等での周知、学校だよりによる啓発等に努めている。

(三) 地域人材の活用

学校に対する家庭や地域の期待は大変大きく、特に地域による教育活動への協力が体制が構築されている。米作りやウナギの放流、はんや踊り、綱引き等における協働体制は、学校運営協議会と地域学校協働活動の両輪に依るものであり、今後更に地域人材の発掘を進め、教育活動の充実を目指す方向にある。

四

おわりに

校長室には、鹿児島県ジュニア綱引競技選手権大会の優勝旗が飾ってある。昨年度、三年ぶりに開催された大会では、女子の部で優勝。九州綱引選手権では、男女ともに優勝という結果を収めた。優勝旗のペナントには、本校が過去五度優勝したことが記されているが、教諭時代にライバルとして共に競い合った当時の記憶が蘇ってくる。亀山小学校の良さの一つとして、みんなで何かを成し遂げる伝統がある。よりよい学校生活を目指し、みんなで学び合い、高め合い、協力しながら創造していくこと、その達成感を味わうことができるよう教職員が関わり続けることが大切であると考え。学校と家庭が協力し、地域の方々を支えられながら、これからの時代を生きていく子供たちの健全な育成に向けて、「魅力ある学校」「魅力ある地域」づくりの推進に尽力したい。



学校の活性化のために「動く」組織づくり

鹿屋東中(隅) 祝 健二郎

一 はじめに

本校は、大隅半島の笠之原台地にあり、北西に高隈連山を望む場所に位置している。また、交通網の要所としての東九州自動車道や大型量販店等が建ち並ぶ国道沿いにあり、今もなお発展を続け、そのため生徒数も増加傾向にある。現在の生徒数は九四八人、学級数は各学年八学級、特別支援学級六学級の計三〇学級で県内有数の大規模校となっている。

二 学校教育目標

本校の学校教育目標は、「向学の意気に燃え、心身ともに健康で、たくましく生き抜く生徒を育成する」である。

この教育目標を達成するために、組織力を最大限に生かし、「動く」をキーワードにした教育活動を展開している。

三 本校の取組

各種委員会を週一回開催し、その中で様々な取組の検討を行っている。

(一) 「研究授業の日」の設定

自主的な取組として毎年、四教科の研究

授業を実施し、授業改善のための研修の場としている。教科構成が複数人からなるメリットを生かした授業研究、小中一貫教育を生かして校区の小学校からの参加により充実した研究授業の日となっている。研修委員会では、研究授業の日に向けて、活動計画と進捗状況の確認、授業改善、教科部会の実施等の取組を行っている。

(二) 生徒会との行動連携

生徒指導に係る一事徹底を生徒指導部と生徒会が連携して行っている。生徒指導委員会が一週間の生徒の実態を踏まえ、全教職員の指導内容、生徒の行動目標として設定し連携しながら取り組んでいる。また、今年度から取組の状況を教職員と生徒会専門部が評価し、成果を確認しながら次週の取組に生かしている。

(三) 不登校生徒への対応

不登校は、本校の重点課題である。そこで今年度、不登校対策コーディネーターを校務分掌に位置付けた。また、スクールカ

ウンセラー等の専門家も参加している不登校対策委員会を月曜日から金曜日に変更し、一週間の出席や対応状況の確認を行い、週初めから登校できる手立てとして週末にできる対応の検討を行うようにした。

(四) コロナ禍前の学校の姿を目指して

三年間のコロナ禍により、様々な学校行事等が縮小、中止となってきた。そこで、今年度の教育活動の在り方を見据えて、昨年度は学校運営協議員やPTA等の意見を聞き、体育祭や卒業式の観覧者の人数制限を緩和するなど段階的な取組を行ってきた。今年度は、五月に開催された体育祭を一日開催とし、観覧者の制限を設けないこととした。また、全校朝会等の生徒が一堂に会する場所を校庭や体育館として感染症対策に努めながら積極的に取り入れていく。今後、コロナ禍前の学校の姿を目指しつつ、三年間の経験を生かした新しい学校の姿を創り上げていきたい。

四 おわりに

昼休み等、生徒と話すことが多い。その度に生徒の言葉に心が洗われるような気がして、改めて教師になれたことに感謝する。学校にとっては、生徒一人一人の存在こそが大切である。だからこそ、教職員が生徒を第一に考え、「動く」組織として全ての生徒が楽しいと感じることのできる学校づくりを続けていきたい。



時代を見据え、夢や目標をもち 成長する子供の育成

花徳小(大) 佐々木 恵 美

一 はじめに

徳之島町北部に位置する本校は、自然・伝統文化の宝庫であり、在籍数四十七名・五学級で、町立幼稚園を併設している。本校では、地の利を生かした環境教育や情報教育、少人数・複式学習指導の充実などの取組を継続し、学校教育目標「時代を見据え、夢や目標をもち成長する子供の育成」に努めている。シマのわれんきや(子供)の学びを次に紹介する。

二 特色ある教育活動

(一) プログラミング教育の推進

本校では令和三・四年度、大島地区研究指定校として「プログラミング的思考を育成する学習指導の創造」を主題に研究・実践を重ねた。一人一台タブレットの整備に伴い、驚くほどの早さで活用スキルを伸ばしている子供たちは、身近な生活や教科等の課題を解決するためのプログラミング学習にも意欲的に取り組んだ。「徳之島の未来を守る」をテーマにしたデジタル防災パンフレットやSDGs 未来ロボットなど、子供たちは身近な生活をよりよくすること

を目標に友達と協働し、楽しみながら粘り強くプログラミング的思考を身に付けていた。同じ学級にいる上の学年が下の学年に既習事項を伝えるなど、日常的にプログラミング的思考を育む情報活用能力を伸ばしている。子供たちの個性や可能性を引き出す新たな学びとして継続したい。

(二) 徳之島型モデル遠隔合同授業の推進

町内の複式学級を有する五校(手々・山・母間・尾母・花徳)では、Web会議システムを用いた複式双方向型遠隔合同授業(徳之島型モデル)について共同研究を行っている。五・六年の授業実践では、本校担任が五年生を担当し、他校の担任が六年生を担当することで、複式を解消した同学年での授業実践を行う。本校の六年生はモニター越しに先生の指示を聞き漏らさないよう集中し、学習リーダーを中心に協働して学び取るうとする姿が見られた。程よい緊張感がありながらも同学年の友達の様様な考えに触れながら学ぶ遠隔合同授業は、子供たちの学びを広げ深めている。

(三) 世界自然遺産のシマを受け継ぐ学び

また、音読交流等の発表会(きゅーがめーらタイム)や修学旅行、社会科見学など五校合同で行う行事においては、通年で遠隔による事前・事後指導及び交流を実施している。校外学習で子供たちが親しく交流している姿を見るのは嬉しい限りである。職員同士も共同で教材研究・ICT利活用による指導方法改善に取り組んでいる。

総合的な学習の時間を中心に、関係機関との連携によるアマミノクロウサギやウミガメの生態調査、SUPを楽しむ海浜活動、島唄や島口・闘牛文化の継承など、郷土の魅力を感じ・発信する学習を位置付けている。昨年度は九州ブロックユネスコ大会や世界自然遺産登録一周年記念大会などで、学習の成果を発表することができた。

三 おわりに

また、今年五月、PTAの方々の御協力と四年ぶりに校内相撲大会を開催できた。子供たちの熱戦で、会場は地域や保護者の方々の歓声と笑顔に包まれた。今後も地域とつながる学びを継続・充実させ、子供たちの活躍の場を広げていく。

本年は、奄美群島日本復帰七十周年の節目の年である。文中の「きゅーがめーら」は島口の「こんにちは」で、「きゅー今日」「うがめーら感謝」という意味があるそうだ。「世界自然遺産のシマを受け継ぐあいさつと島唄の響く美しい学校」をキャッチフレーズに、子供たちが輝く学びの充実に努力したい。



「三所懸命」三つの柱に向かって」

川内中央中(北) 上 栗 博 文

一 はじめに

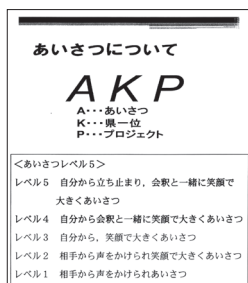
本校は、薩摩川内市の中心地に位置し、川内川によって発達した沖積平野の川南に広がる本校区には、市役所をはじめとした官公庁や川内駅、多くの商業施設が立ち並ぶなど、本市の要衝をなしている。また、本校区には四つの小学校があり、本市が推進する小中一貫教育に積極的に取り組んでいる。コロナ禍の対応が緩和されてきた本年度は、コロナ禍以前の取組を踏まえながらも、更なる成果を目指し、見直しと改善を進めているところである。

さて、本校は市中学校・義務教育学校生徒会連絡会の本年度の事務局校である。本連絡会におけるテーマに関する意見交流をはじめ、円滑な連携を図ることができるよう本校の生徒会を中心に会の運営に努めさせたいと考えている。そこで、今回の機会に、本校における生徒会活動を紹介したい。

二 A K P 活動

題名の「三所懸命」三つの柱に向かって」は、本校生徒会のスローガンである。この三

つの柱とは、「皆があいさつを交わしあう学校」、「皆が平等で全進していける学校」、「皆が明るく、楽しく、実に面白い学校」である。これらを全校生徒が一丸となって目指すための取組の検討と実践化に向けて、生徒会が自主的・積極的な取組を推進している。その取組の一つに「A K P 活動」がある。これは、「あいさつ県一位プロジェクト」を略したもので、あいさつレベルを五段階に設定し、スモールステップで達成を目指していく取組である。生徒会では、全校生徒がレベル四以上の達成を目指して、四月の生徒会オリエンテーション



の際に、目指すあいさつの姿を生徒会執行部が実際に示したり、各学級の生活部が年間を通してあいさつ運動に取り組んだりしている。

三 全進する学校

「三所懸命」の二つ目の柱にある「全進」には、全校生徒が目的を共有し、協力して進

んでいこうとする生徒会の思いが込められている。この思いの具現化を目指して、生徒会の各専門部は具体的な取組を進めている。

例えば、各学級の広報部は、学級新聞を毎月作成し、掲示する活動に取り組んでいる。学級目標の意味を解説したものや、生徒一人一人の学級への思いなどを記事にすることで、学級全員の思いを一つにすることをねらいにしている。生徒会のベースとなる各学級がまとまることで、「全進」につながる活動となつている。また、保健部が中心となつて取り組む体育大会では、全校生徒が応援団に所属し、それぞれのリーダーを中心に応援活動に取り組んでいる。さらに、美化部は無言清掃に取り組んでいる。無言だからこそ、他者を思いやり、協力して作業を進める姿勢が自然と身に付いているように感じる。他の専門部においても、それぞれ工夫した取組を推進し、「全進」する学校を目指している。

四 おわりに

この四月に本校に赴任したばかりであるが、生徒会の自主的で真摯に取り組む姿を多く見ることができている。コロナ禍の対応が緩和されてきた本年度は、更に地域貢献を視点とした取組も検討しようとしているようである。これからも、生徒会の自主的な活動を支え、力強く後押しする学校を目指して取り組むことで、生徒一人一人が輝く教育活動につないでいきたい。



至誠を持って正対する

西紫原小(市) 平川 了二

「至誠を持って正対する」この言葉は、前任の校長先生が学校の基本理念として掲げたものである。

至誠とは、この上ない誠意、誠実のこと。正対とは、真正面から向き合うことを意味する。

「難しい課題を避けて通ったり、斜に構えたりすると、更に大きな問題となる。何事にも真心を持って正面から向き合うことが大切である。」ということを表す言葉である。

昨年の四月に着任して以来、保護者への対応や地域への対応だけでなく、職員や子供たちへの対応等で様々な判断が求められた。

その一つ一つを思い出すと、本当に誠実に対応できていたのか、正面から向き合っていたのかと、疑問に感じることが多くある。

そのときには精一杯考えたつもりであつても、時間を置いて後から考え直すと、その場しのぎの対応になっていたのではないかと、相手は納得していなかったのではないかと、後悔することばかりである。

孟子の一節に「至誠にして動かざる者は未だ之あらざるなり。」という言葉があるが、これは「誠の心を持って尽くせば、動かなかった人など今まで誰もいない。」という意味らしい。

学校経営を行うには、校長が明確なビジョンを示してリーダーシップを発揮することはますます大切なことである。

しかし、様々な判断を求められたときや新たなことを始めようとするときには、誠意を持って説明したり、相手の話をしっかりと聞いて、そのことを実施する際の課題を解決したりする姿勢が、校長には何よりも必要であると強く感じる。

校長室の机に向かうと、正面の壁に前任の校長先生が書かれた「至誠正対」の文字が、額縁に入れて飾られている。

今年度で校長という職を退く身ではあるが、この言葉の重みを忘れずに、校長としての最後の一年間を務めたい。

プラスαの仕事を・・・

万世小(南) 磯口 英樹

最後の一年になって、原稿依頼の話がきた。テーマは「心に残るひとこと」である。これまで数え切れないたくさん言葉がかけられてきた教職生活。どの学校でも、校長先生、教頭先生をはじめ、多くの同僚、そして保護者や地域の方に数え切れないたくさん教えをいただいた。どのひとことで書くか迷った。

そんな中、学校経営を進める上で、念頭に置いているひとことがある。それは、教頭職二校目のとき、M校長先生が、着任早々最初の職員会議で、新年度の校務分掌を発表された後、「先生方、今、校務分掌を発表しましたが、与えられた仕事『プラスαの仕事』をしてください。」と話された。このときは、「えっ」と、思った。プラスαの仕事？どの先生も自分の仕事をそれなりに一生懸命するはずである。それ以外に何を、どんな仕事をするの？と、隣で首をかしげた。

このプラスαの仕事をどのように捉えたらよいのか考えた。確かに学校は、職員一人一人に分掌があり、その担当職員が中心となって校務を進める。しかし、自分の分掌だけをやっていたのでは、学校の組織としての役割は果たせない。さらに、職員間の協働性も生まれない、十分な教育活動も期待できない。M校長先生の



言われた「プラスαの仕事」は、自分の役割や仕事を進める上で、それに付随するところまでを考えて仕事を行うことが、組織として重要であると、言われたのだろうと、自分なりに解釈してきた。校長の補佐として、また、学校経営者として、これまで取り組んできたが、プラスαの仕事が十分に実践できたとは言いがたい。しかし、残りの教職生活「プラスαの仕事」を一層心がけて、教師としての役割が果たせるよう努めていきたい。



「しなやかでやわらかな感性で

したたかに生きる。」

安城小学校(熊) 吉 満 ふくみ

勤務先の学校に、二人の我が子と一緒に通い、校務分掌が増えた三十代半ばの頃、私は仕事と家庭の両立に悩んでいた。「○○しないといけない。○○するべき。」と思って、頑張れば頑張るほど、うまく進められず、何だか空回りしている自分に気がき始めたのだ。我が子を朝から叱って送り出し、学級の子供の前に立ったとき、まっすぐな眼差しで私を見つめ、話を聴いている子供たちを見て、あふれ出そうな涙を必死でこらえたこともあった。「私は、このまま

でいいのだろうか…。」

そんな私の様子に気付いたのだろう。懇親の場をよく設けていた職場の同僚たちが、何度も私を誘ってくれた。それまでは、人に弱音を吐くことを恥と思っていた私だったが、少しずつ学級のことや授業づくりのことなどを相談できるようになった。そのときに、ある先輩教師から言われたのが、タイトルのひとつである。そして、「あなたは素直に聴こうとするやわらかさ、感性はあると思うけど、しなやかな感性で、したたかに生きるという点でまだまだねえ。したたかは『強か』と書いて、強く、たくましく、確かにという意味合いだよ。」と、諭された。その日以来、迷ったとき、苦しいとき、判断をせねばならないときなど、人生の様々な場面において、このひとつが自然と私の中に降りてくるようになった。

しなやかとやわらかは似ているようで違いがある。しなやかは英語だと flexible で、曲げることができると硬さも簡単に折れない、つまり芯がある、ということになる。やわらかは英語だと soft で、柔軟性の意味合いが強い。この二つの感性をもって、したたかに生きていく、先輩教師が二十年前に教示されたこのひとつは、まさに予測困難な時代を生き抜く子供たちを育てるための示唆となっている。そして、このときの同僚たちとの関係性を生み出した学校の雰囲気づくりは、学校経営をする中で、一番大切にしていることである。

こん本を読んでみやい

国分中(始・伊) 小牟禮 勉

「小牟禮さん。こん本を読んでみやい。」

初任一年目。当時の校長から、本を差し出された。内心そんな余裕はないな・・・。と思いつつも、校長から勧められたからには、読まないといけないだろうとか、断つていいものだろうかの判断も、断ることもできずに、初任の私は、その本を受け取った。途中で読んでいいのか、最後まで読み終えたのかの記憶も定かでない本であった。あまり長く借りているのも失礼に当たると思いつつお返しした記憶がある。

校長の「いけんじゃったけ。」との問いに、初任者が行った授業反省のように、当たり障りのない感想を添えたのだろうが、本を薦められたことがあったことも、記憶から薄れていた。

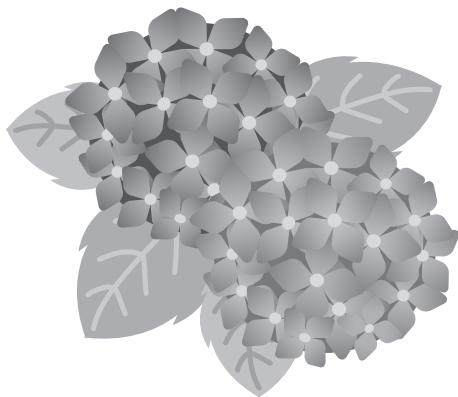
ある本がメディアで話題になった。職場でもその本の名前をよく聞くことが増えた。上司も研修会で紹介されていた。自分が読んだ後、子供に読ませるのもよいだろうと思いい、購入した。今年の全国学力・学習状況調査(国語)の問題ではないが、読み進めるうちに何故か、違和感を抱いた。そして、雪合戦の場面で確信した。この本は、初任時代の校長から勧められたあの本であることを・・・。吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」であった。二十九年後の再会であった。私の採用は、昭和六十一年。「君た

「ちはどう生きるか」の第二版が発行されたのが、昭和五十七年である。

あのとき、どのような意図をもたれて本を薦めてくださったのか。教師としてあまりにも頼りない私へのエールだったのだろうか。残念ながら、今となつては聞くことはできなくなつた。その出来事以来、個としても、職としても学びの浅さを埋めようとして、読書を心掛けているつもりだが、なかなかである。

校長先生。あの頃の校長のようにはなれていませんが、私なりに後輩を育てようと日々頑張っております。

素敵な本を紹介してくださり、ありがとうございました。



ある日の校長講話



みんなちがつて みんないい

協和小(隅) 富田 茂也

体育館の後ろにみなさんが作ってくれたワールドカップ出場国の国旗カードがあります。今日の朝、日本はスペインに勝って決勝トーナメントに勝ち上がりました。とてもうれしく歴史的な日になりました。ちなみに今日は先生の誕生日で自分にも最高のプレゼントでした。

さて、それでは日本と対戦した国の国旗をみんなで見えていきましょう。コスタリカ、ドイツ、スペイン、世界には色々な国があつて、文化や考え方、肌の色、服装など色々なちがつてがあります。でも、そんなことで差別することなく、どこの国とも仲良くしなければなりません。

毎年、十二月四日から十日までの一週間は、「人権週間」といって人が生まれながらにもつ

ている権利についてしっかりと考える期間です。今年で六十六回目になります。「人権」とは、ずばり一言で言うところ「思いやり」です。だから、「人権週間」とは、思いやりの大切さを改めて考える一週間なのです。なかでも大切なことは、「相手の気持ちを考えること」と「違いを認め合う心を育てること」です。「相手の気持ちを考える」のに大切なことは、「自分がされていやなことは、人にしたり言ったりしないこと」です。「違いを認め合う心を育てる」のに大切なことは、「自分がいやでないことでも、人によつては、いやなこと」もあることに注意することです。気に入らないから、「うざい」とか「死ね」とか言うのは、絶対にだめなことなんです。このことをしっかりと頭にいれて、学校生活を過していきましょう。

ここで少し体を動かしてもらいます。同じ誕生日のお友達と手をつないで座りましょう。九月生まれが多いようです。このように生まれた日がちがうように、みなさんのよさも人それぞれちがいます。それでよいのです。

最後に、金子みすずさんの詩を紹介いたします。『私と小鳥と鈴と』

私が両手をひろげても、お空はちつとも飛べないが、飛べる小鳥は私のように、地面(じべた)を速くは走れない。私がかからだをゆすつても、きれいな音は出ないけど、あの鳴る鈴は私のように、たくさんな唄は知らないよ。鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがつて、みんないい。

校訓碑が語りかけること

天保山中(市) 今 井 誠

本校の正門には、色とりどりの花々が並べられ、皆さんや訪問される方々を迎えてくれます。その先の正面右側には「亡師亡友を追悼する碑」が、左側には「校訓碑」があります。両碑とも、昭和五十九年六月に建立されたものです。

校訓とは、学校が定めている教育に関する方針などを、文章や言葉で表したものであり、本校の校訓は、「自主・好学・友愛・健康」です。この言葉には、天保山中学校の生徒たちに、こうあってほしいという先人たちの願いが込められています。「自主」深く考え、主体的に行動できる生徒。「好学」意欲的に学び、責任を持って粘り強く実践する生徒。「友愛」誠実で、自他を思いやることのできる生徒。「健康」心身ともに健康で、連帯感・望ましい勤労観に満ちた、たくましい生徒。時が流れ、時代が変わっても変わらないもの(不易)、その一つが校訓であると言えます。今も昔も、いや、今だからこそ、大切にすべきものなかもしれません。さて、毎朝七時三十分を過ぎると、一人、また一人と、正門に生徒が集まり、あいさつ運動が始まります。同時に、ほうきやビニール袋を持って校門を出て、学校の周辺を清掃してくれています。多い日は、六十人を超える皆さんが

活動しています。四月に赴任した私は、この活動は、生徒会で当番を決めているものだと思っていました。だから、毎朝活動が行われているのだと。先日、生徒会役員の一人が、「皆さん、ボランティア活動ありがとうございます。今朝は、生徒総会の事前準備をしてもらいますので、少し早いです。活動を止めて教室に入ってください。」と、参加者に声を掛けていました。私はそのとき初めて、これまで見ていた朝の光景は、全てが自主的な活動であったと知りました。恥ずかしさ以上に、皆さんのことが、とても誇らしく思えました。校訓碑も皆さんの姿を見て、きつと喜んでくれていると思います。

進路で迷ったとき

薩南工業 久米村 順 一

皆さんは、世の中にいったいどのくらいの数の仕事があると思いますか。その数はなんと一万八千種類以上だそうです。高校卒業後に就職する人も、大学や専門学校などへ進学後に就職する人も、そんな膨大な職種の中から、何らかの縁があって自分が知ったり、教えてもらったりしたほんの一握りの職種から、自分の仕事を選ぼうと考えているわけです。それは、自分と何かしらの縁があるからこそ、その仕事に出会

えるんだと思います。

人との出会いは縁ですし、それが進学先や就職先であってもまさに縁だと私は思っています。もちろん色々な情報を集め、たくさんのアドバイスをもらい、じっくりとしっかりと自分で考えて決めることに変わりはありません。大いに悩んでそして考えて自分の進路を決めてください。それでも、なかなか決められないときには、自分が今考えている選択肢の進学先や就職先が、自分に何かしらの縁があったからこそ悩んでいると思います、そして、その縁を大切に考えて前向きに捉えようと、きつと自分の道が開けてくると思います。

そもそも仕事は、自分のやっていることが好きになれると、どんどん楽しくなり、やりがいが生まれてきます。もともと自分が希望していた仕事であっても、好きになればそれは辛くきついと感じるばかりです。自分に与えられた仕事を好きになる努力や工夫をして、自分の仕事が好きになれる人が、自分の仕事にやりがいを感じるようになります。「好きこそもの上手なれ」です。

迷っているときや苦しいときには、悩みを一人で抱え込まず、誰かに相談し、聞いてもらうだけでも、心は軽くなります。考えても悩んでもどうしようもないときは誰かに聞いてもらって、人との出会いや、これから選ぼうとする進学先、就職先との縁を大切にしながら、少しづつでも、前に進んでください。

話のひろば



学びが生む楽しみ

清和小(市)

狩集

淳

若いころ、川内の少年自然の家で仕事をさせていただいたことがある。初めての社会教育

施設での勤務であり、全てが新しい学びだった。

中でも自分の勉強になったのが、天体に関するプログラムの指導であった。川内の自然の家には、プラネタリウムが常設されている。その頃の私は、星や天体にほとんど興味がなく、宇宙に関する知識も乏しかった。乏しかったというより、ほとんど知らなかった。

当時の自然の家の天体関連プログラムは、「季節の星座に関する話」や「星々が織りなす天体現象」、「大型の双眼鏡や望遠鏡による観望会」など様々であった。

中でも、プラネタリウムにおける指導は、機

器が古くその操作が手動だったこともあり、難しかった。ドーム内の明かりを全て落とし、手元が見えない中で操作しなければならず、非常に苦労した。

昼の休憩時間や勤務終了後に、ドームに籠り、何度も何度も練習したことを覚えている。

地域の方々を対象に行うプラネタリウムの一般開放では、天の極点に固定されていた極軸補正のボタンを押ししてしまい、誤ってオーストラリアの星空を投影したことがある。突然の出来事に頭が真っ白になったが、来場されていた方々は、南十字星や大マゼラン雲など、日本では見ることのできない夜空を眺めながら、感動されていたのを思い出す。

また、望遠鏡を通しての学習も楽しかった。月のクレーターや土星の環の様子、木星とその衛星など、本物体験を子供たちは非常に喜んでいた。実際のものを自分で見て心震わせることは、非常に大きな体験になる。

仕事として始まった学びであったが、これらのが、今の自分にはとてもありがたい経験となっている。どのような形でスタートしても、興味をもって学ぶことがいかに大切か、面白いと感じることや不思議なことへの学びが、新しい楽しみを生んでいくことを、子供たちには伝えていきたい。

今では、夜空に輝く星々をたどり、季節ごと

に移り変わる星空を眺めることも一つの楽しみとなっている。宇宙についてはまだまだ分からないことも多い。夢が叶うなら、あのプラネタリウムで見た南半球の星々を、自分の目で見てみたいものである。

「今も幸せに」

平出水小(始伊)

鉢窪

伸吾

本年度、最初の職員会議で、学校経営方針について職員に次のように話しました。「教育の目的は、

将来幸せに生きる力を付けることだと思っています。しかし、いくら将来の幸せのためでも、今が幸せでなければ意味がないと思っています。」昨年度も、その前の年も同じことを言ってきました。

私が教頭二校目の時、町内の教頭先生方を集めて研修会がありました。講師は、ある市の教育長先生でした。いきなり、ホワイトボードに直線を書いて、このような話をされました。

「ここが過去、ここが未来、ここは今。英語で言ってみましょうか。過去はPast。未来はFuture。じゃあ今は何と言いますか。

英語で、今は Present と言います。なぜか分かりますか。今、こうして生きている今は、神様が与えてくれた時間だからです。今、私は皆さんに話をしていきますが、明日になればしゃべっている今は過去になります。そして、明日が今になります。人は、未来、今、過去を繰り返しながら生きていくことになります。でも、人の寿命はいつかは尽きます。それがいつなのかは、誰にも分からないのです。だから、本当に明日があるのかは確定していかないけれども、間違いなく今はある。だから、まず今を大切に生きてください。」

そして、こう続けてくださいました。

「教頭職は大変ですよ。皆さんは、おそらく責任感も強く、自分が学校を回さなければと思っているのではないのでしょうか。でも、仮に皆さんが病気になったとします。そうした時に皆さんはどうされますか。頑張つて、学校のために尽くそうと思つていていいのですか。でも、それは違います。学校の教頭という立場の皆さんの代わりはいくらでもいます。でも、家族にとつての皆さんの代わりはいません。ですから、そういった場合は、自分のことを第一に考えていいと思つています。それが、今を大切にすることではないかと思つています。」

話を聞いて、肩の力が抜け、気持ちが楽にな

りました。それから、「将来だけではなく、今も幸せでないと」と先生方に伝えています。

芳朗先生と校歌

住用小(大)

山

美奈子

(旧徳之島高校校歌

より)

これは私の母校徳之島高校の校歌の二番の歌詞の一部である。作詞者は奄美群島日本復帰運動のリーダー泉芳朗先生。詩的な言葉で綴られた校歌は、歌ついても心地よく、今でも口ずさむことができる。南国の夏を思い出させる歌い出しは、自分たちの島の美しさを見事に表していて、詩人としての先生の豊かさを感じる。歌詞は「集う若者わが生命高鳴る自由起つ正義」と続く。自由を求め高まる声、正義の行動を起こせよと若人たちが奮起させているようである。まさに命を懸け、信念と情熱で、二十万の群島民を奮い立たせたリーダーの魂がそこにある。復帰運動は血を一滴も流すことなく行われたが、血の通った「言葉」で皆を率いた。

この校歌が制定されたのは昭和二十六年。奄

美大島日本復帰協議会が結成され、芳朗先生が復帰祈願断食をおこなった年である。奄美群島中が復帰運動真つただ中であり、アメリカ統治下におかれた奄美の人々は、戦後復興も進まず苦しい生活を余儀なくされていた。そんな中、「日本に戻りたい。」といった島民の思いを一つにし、日本復帰に向けて情熱を注がれた芳朗先生。復帰運動は民族運動であるとし、「平和主義・非暴力・無抵抗の抵抗」を貫いた芳朗先生の功績は筆舌に尽くしがたい。数年前まで国と国との間に大きな戦争が繰り広げられていた時代に、「我々は日本人である」という誇りを取り戻すため断食という手段で群島民の思いを世の中に訴えた芳朗先生には、尊敬の念しかない。奄美群島の学校には、芳朗先生によつて作詞された校歌をもつ学校が何校もある。島の美しい自然や、そこで営まれる島民の暮らしや心を、未来を担う若者たちに「校歌」という形で残された芳朗先生。その思いは今なお、奄美群島の子どもたちに歌い継がれ、引き継がれている。

今年には奄美群島日本復帰七十周年。児童生徒たちには復帰運動や芳朗先生の偉業を学ぶことで、自分たちのふるさとに対する誇りや生きる指針を心の奥底に育んでほしいと切に願う。

読書案内



■ 谷川浩司 著

藤井聡太はどこまで強くなるのか

〈名人への道〉

出水小(北) 重藤和伸

大谷翔平選手の「すごさ」は分かりやすい。打球の飛距離や投げるボールの球速、ホームラン数といった数字だけでなく、映像で打つ姿や投げる姿が見られるからだ。常人には、到底及ぶことのできない領域の人間であることは一目瞭然である。

一方、藤井聡太六冠(五月末現在)の「すごさ」は分かりづらい。二十歳という若さで六冠という偉業を成し遂げたというすごさは分かる

が、一時代を成した羽生善治九段や渡辺明名人が、なぜ藤井六冠を相手に敗戦を重ねているのか、何がどのように優れているのかが分からない。多分、対局の解説をされても、私にはその「すごさ」は理解できないだろう。

本書では、大山康晴十五世名人や中原誠十六世名人といった、往年の名棋士たちの戦歴や戦い方なども紹介されている。将棋ファンではない私にとっては「名前は知っていたけど、こんなに素晴らしい功績を残された方々だったのか。」と、素直に驚かされたが、この名棋士たちと藤井六冠の戦歴を比較すると、どの名棋士も霞んでしまうほど異次元の強さを誇っている。その強さの源は、AIを駆使した研究をしつつも、最終的には自身の力で「考え抜く」姿勢にあるという。

「人間が行う仕事の約半分が機械に奪われる。」と、オックスフォード大学のオズボーン准教授が論文を発表して以来、教育界にも衝撃が走り、学習指導要領の改訂においても、AIでは成し得ない「主体的・対話的」や「人間性」といったキーワードに重点が置かれている。AI技術がますます発達し、人間の能力を凌駕する状況になったとしても、藤井六冠を始めとする棋士たちは、AIを「道具」として使い、「人間ならではの」の能力を最大限に発揮しながら活

躍していくだろう。その意味で藤井六冠は、教育界が理想とする人間像の一人なのかもしれない。ChatGPTなどの生成系AIの登場によって、人間とAIの境があいまいになりつつある現代において、まだまだ人間の可能性を信じられると思えた一冊であった。

講談社+α新書 九〇〇円

毎月届く「PHP」

財部南小(隅) 川畑由美子

毎月の学校だよりに寄せる「校長あいさつ」。今月のテーマは何にしようかと迷うことがある。また、思いに沿った適切・適当な言葉がうまく浮かんでこないこともある。そんなとき、毎月協賛企業様の御厚意で届くPHPにヒントをもらうことがある。表紙にはポジティブな言葉が並び、なぜだかその時の自分の心の面持ちを代弁してくれているかのような言葉が並び、ひとり「うん！そうだ！」と自己確認できる。

カウンセラーの「十代からの自分を守る心の技術」の連載では、心に不安を抱えている児童へのタイムリーなアドバイスが掲載されてあ

り、保護者に紹介したこともあった。十代とはほど遠いわたしが読んでも、心の持ち方を楽にさせてくれる内容も多く気持ちが軽くなったり考え方を転換させてくれたりして自分自身を振り返り心に元気のエッセンスを注入してくれる。

子供たちから依頼を受けた卒業文集の原稿には、三月号の裏面の「弥生の空は」に掲載されていた桜の花芽について書かれた文をヒントにしてお祝いの文章を次のように綴った。「桜の花芽は、夏までに形成され、秋には休眠状態に入ります。この花芽が眠りから覚め開花するには、冬の厳しい寒さにさらされなければならぬのです。(中略) 眠りから覚めた花芽は、早春の気温上昇とともに膨らみ、やがて開花を迎えます。満開となった桜は、人々の目を楽しませるばかりでなく、花びらを舞わせ門出を祝福する演出をするのです。(中略) 入学してから卒業までの様々な経験を経て、多くの伝統や希望を下級生に残してくれました。それは、桜の花芽が美しく咲くための厳冬の準備期間と同じで雌伏の時だったと思うのです。(中略)」

校長として、人として、おおらかでしなやかに元気であるために心に香るエッセンスと彩りを与える本の中のひとつである。

PHP研究所 三〇〇円

■ 大八木弘明 著

必ずできる、もつとできる

面縄中(大) 福、永 隆 幸

わたしは、マラソンや駅伝の中継を見るのが大好きである。妻からは、「ただ走っているだけなのに何がおもしろいのか」と、あきれられているが。特に秋から冬にかけては、高校駅伝や都道府県対抗駅伝、実業団駅伝等があるが、大学生の三大駅伝が最も好きだ。ブラリと入った書店で今年の箱根駅伝で優勝した大八木監督の本が販売されていたので、手に取ってみた。

著者が指導する大学は、二〇〇八年から一三年間箱根駅伝で優勝することができず、「常勝軍団」と言われたチームは栄冠から遠のき、著者の熱意も一時的に失われつつあったようだ。しかし、六〇歳を迎えた頃に「このまま終わっていいのか」と、自問自答を繰り返し、自身自身が時代に合わせながら指導方法を変えていかなければということに気づく。著者自身がどのように変わっていったのか。そこで気づいたことや感じたことが著されている。

第一章 栄光から遠のく

第二章 監督自身が変わる

第三章 指導を変えていく

第四章 人作り・組織作り

第五章 指導者の務めとは

この中で、学校経営に特に役立つと思われるのは、第二章と第四章だ。「指導者の仕事は人を育てること」「すべての基本は選手を観察すること」「時代に合わない慣習は変えていく」「役割を与え、やる気を引き出す」「陰の功労者に光りを当てる」「一人ひとりのカラーを消さない」等、校長として意識し、実践していかねればならない言葉ばかりである。

最後に、職員を育てるためには、やはり自身自身が変わらなければならないと、強く思わせしてくれる一冊であった。

青春出版社 一五〇〇円



食

大学一年喫茶店でのアルバイト、ホールで注文をとる。手のひらに載せるとトレーが滑るから三本の指で支える。トレーにどれだけ多く載せられるかバイト仲間と競う。厨房に入り、コーヒーター、パスタ、サンドイッチ、パフェを作る。パフェのリングでウサギを作る、リングに切り身を入れて段を作る、最高五段だったか六段だったか、これもまた競い合う。フライパンを振る楽しさを知った。飲み会の二次会で行ったカフェバーがバドワイザーとハイネケンの空き缶で設営された空間。次のバイト先は「こ」。テレビで見るカクテルの振り方、作り方、昼は料理をやっていて、専門的なことを教わり、食の世界がますます魅力的に感じ、のめり込んでいった。チーフが長崎出身、同じ九州で私のことは「あぶ」と呼んでかわいがってもらった。年上には「あぶ」年下には「あぶさん」と呼ばれていた。二〇一九年に他界されるまで年賀状で、お互いの近況報告を続けていた。

趣味・文芸

趣味の変遷

スキー 前々から「絶対に楽しいし、お前は夢中になる」だから行こうと誘われていた。就職では鹿児島に帰るつもり、その楽しさを味わってしまおうと、鹿児島に帰ったらできなくなるので、それがストレスになるから行かないし、しないと断り続けていた。一年目の冬はそれで逃げ切れた。しかし二年目の冬、友人たちが無断でスキーツアーの中に私の名前を入れて申し込んだ。「はい、行くしかない」などと言われ半ば強制的に連れて行かれた。確か竜王スキー場。リフトに乗せられ、上まで連れて行かれた。「じゃー下で待ち合わせ」ボーゲンすらまともにできずに何回も転びながら「全然楽しくない。二度と来ない。」と叫びながら、長い

道のりを、長い時間をかけて、下に着く頃にはねじが切れそうなロケットのように不格好に動いていた。夕食をとり、ゆっくりできると思いきや「ナイター行くぞ」全く楽しくなかった初日だったが、二泊三日の最終日になると転ぶ回数が少し減り、もう少しかっこよく滑りたいと思うようになった。悪友が言ったとおり、気付けば志賀高原、野沢温泉、蔵王、苗場、；思い付くだけ書いたけど、あとどこに行つたのだろう。スキーに行くためにアルバイトする生活だった。そんなとき、「スキー場に住み込めばいい」という名案が浮かび、三年目の冬と春は長野県の梅池スキー場に住み込んだ。雪かき、雪下ろしから始まり、朝食の準備・後片付け、部屋掃除、洗濯、夕飯の準備まで終わると「〇〇時ま

上小川小(始・伊)安 武 慎 一

でに帰っておいで」と言われゲレンデでの自由時間。スキー検定も受けた。何級だったのだろう。住み込み先の小学生の子は通学にミニスキー持参、文化の違いを感じた。野沢菜の味を知った。「世の中にこんなに楽しいことがあるのか」悪友たちに感謝した。が、就職で鹿児島に帰ってきて、当初懸念していたことが実際に起きた。「スキー場がない」。新採、二校目くらいまではもがいていた。阿蘇、大山、五ヶ瀬、韓国、そして大学の友人の家に泊まりに行ったり

ソフトテニス、陸上、今では考えられない練習、合宿、遠征。西に強いチームがあれば西へ、東に良い指導者がいると聞けば東へ。部活動の醍醐味、楽しさを教えてくれたメンバーとは今でも飲み会を通して、繋がっている。

演劇 学校行事は大好きだったが、文化祭、特に劇指導がもやもやしていた。あるとき、ある劇団が十日位のスパンで養成なのか指導なのかを行うという内容を雑誌で見つけ、東京へ行って学んだ。翌年、一緒に演劇の練習をしていた女の子がTVDドラマに出ていたのに驚いた。数年後、新聞に「枕崎 劇団ぶえん団員募集」を発見し、入団した。「漁師町より・生きる」で船員の役をいただいた。「アメンボ赤いな あいうえお」から始まり、長い月日をかけて一つの演劇を作る。当日市民文化ホールでの公演は緊張マックスだったが、やり終えた後の感動は最高だった。この感動を子供たちにも味わわせたいと思った。

読書 にもはまった。図書館に足繁く通うようになった。志布志の教頭会では「課題図書」があり、輪番で「おすすめの本」を紹介し、次回までに全員が読み、意見・感想を言い合う。普段読まない本を紹介されると読書の幅が広がる。小説等も含め年間七〇、八〇冊は読んでいた。しかし、直近一年は時間をうまく使えず、その半分も読んでいない。

今後 周りでは、健康志向が高まっている。気にせず生活していたが、「あなたの健康年齢」などが送られてくると見えないわけにもいかず、気にしないわけにもいなくなる。今後、ウォーキング、トレーニング、ときには霧島連山に足を運ぶことが趣味になるであろう。



歴史、伝統、技術の町

南種子町とともに

西野小(熊) 霜 田 さおり

一 南種子町の概況

国道五八号線の本町入り口には、「歴史と伝統、技術の町」と書かれた看板がある。稀少な古代遺跡から始まる歴史と、脈々と受け継がれる踊りや民謡、相撲、そして、世界一美しいと称されるロケット発射場。豊かな自然を含めた学びの資源に恵まれていることを凝縮した言葉である。町内には、八つの小学校(中平・荃南・西野・大川・島間・花峰・平山・長谷)と、南種子中学校があり、施設分離型の小中一貫教育を推進している。中でも、年間を通して行われる集合・交流学习では、JAXAと連携した授業も展開され、本町の特徴が生きる取組の一つとなっている。

また、本年度で二十八年目を迎えた宇宙留学制度は、毎年全国各地からの百名を超える応募がある。中平小を除く七小一中が五十名程度の家族留学生、里親留学生の受入れを行っているっており、小規模校において多様性を体験する好機となっている。本制度を通じた子供たちの絆は、時を経ても深く結ばれており、「二十歳の集い」で帰島する元留学生も少なくない。

二 学校の概要

本校は本年度一四九周年を迎えた、全校児童二五名の小規模校である。校区は、本町の南西部に位置し、校区名は「西之」である。面積は町内随一の広さを誇り、十三集落で構成されている。校区内には、鉄砲伝来の地として有名な門倉岬を有している。この岬には御崎神社があり、江戸時代には島尾大明神と呼ばれ、種子島最南端から国土の安穩を祈願する神社としてあがめられてきた。この神社では、旧暦九月十九日に大祭が行われる。その際、奉納される願成就の「大踊り」は、島内最古の踊りとして古文書に記されている。



同日、本校児童も棒踊りを披露させていた。豊年踊りの一種である「棒踊り」はかつて西野中学校が継承してきた伝統芸能であったが、同中が平成五年度をもって閉校したため、その後、本校が引き継いだ。真つ青な海を背景に、色鮮やかな衣装をまとって勇壮に舞う全校児童の姿に、地域の文化を継ぐ力強さを実感する。

棒踊りと共に伝承しているものに「福祭文」がある。「くさいもん」と呼ばれる祝い唄は、正月七日に、地元の方々と子供たちが家々を回り、一年の無事と繁栄を願いながら歌う。日が落ち、辺りがしっとりと暗くなってきたころ、集落のあちらこちらから柔らかな歌声が響く様子は、とても幻想的である。本校では、福祭文を町音楽発表会や西野フェスティバル(学習発表会)で地域の方々に聞いていただいている。

いずれの練習でも、地元高学年が中心とな

り低学年や宇宙留學生を粘り強く導いている。この姿は、本校教育理念の一つ「もろとも」の精神を具現化する場の一つである。同時に、伝統芸能の担い手不足など学校を取り巻く環境の変化の中で、学校の学習活動と地域行事がしっかりと繋がることで、「地域あつての学校、学校あつての地域」を体現する活動となっている。

また、保護者や地域の方々の学校への思いは熱く、令和元年度の校舎新築以後、三年がかりの校庭の芝生化や土俵作り、掲揚台建設、学校農園作り等、重機を用いた大がかりな環境整備を主体的に推進してくださった。更に、ウミガメの孵化活動を中核とする環境教育では、町指定文化財記念物(名勝)である門倉・前之浜自然公園の海浜(産卵場所の一つ)の清掃をPTA活動で行っており、今年で二〇年目を迎える。外海の波音をBGMに、母ガメの足跡を見ながらの活動は、本校の特色ある教育活動の一つを支えるものとなっている。

三 結びに

昨年度のH3ロケット打上げについては「成功」が当たり前と考えていた子供たちにとっても大きな学びがあった。何度かテレビ取材を受ける度に、教員共にロケット製作の背景に目を向けることとなった。目標に向け、最新科学を駆使し、悔し涙を流しながら前進する大人の姿に臨場感をもって学ぶことができる素晴らしい環境にあることを実感した。歴史と伝統の継承とともに、国や企業と連携した事業も次々に展開している南種子町。この豊かな郷土に感謝し、誇りをもって生きていく児童の育成を保護者や地域と「もろとも」に目指していきたい。



専門部だより

研究部からのお知らせです。昨年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、予定されていた、全県規模以上のほとんどの大会が、取りやめもしくは、リモートでの開催となり、鹿児島小・中学校校長研究大会についても中止となりました。

本年度は、新型コロナウイルス感染症が収束したわけではございませんが、新型コロナウイルスの感染症状の位置付けが五類に移行したことを受け、新しい生活様式の中、学校経営の在り方を考え本県学校教育の充実を図るべく、効率的で安全な大会となるよう、本部と連携をとりながら、実施の方向で計画を進めているところです。

具体的には以下のとおりです。

- ① 内容を精選し、一日開催で行う。
 - ② 集合を分科会場とし、全体会はリモート配信により分科会場で視聴する。
 - ③ 分科会は参加者の距離及び換気に十分配慮した上で、通常に近い形で行う。
- なお、これらに合わせ、会場についても複数の施設で行いたいと考えています。詳細については、決まり次第、各地区の研究部長さんを通じて、連絡できるようにしたいと思います。御理解のほどよろしくお願いいたします。

令和五年度

各種研究大会

(予定等) について

鹿児島県小・中学校校長研究大会

一 大会主題

「あしたを拓き、心豊かでたくましく生きる人間の育成を目指す学校教育の創造」

二期日

令和五年十一月十日(金)の一日開催

三 会場

サンロイヤルホテル
アートホテル鹿児島 等

四 内容等

最初から十三分科会の会場に分かれて、お集まりいただきます。具体的な内容、日程については検討中です。実施の最終判断は、九月初旬に行います。

第七十五回 全連小東京大会

一 大会主題

「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」

二期日

令和五年十月十九日(木))
令和五年十月二十日(金)
令和六年度開催地
徳島県(発表なし)

第七十五回 九小協佐賀大会

一 大会主題

「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育

二期日

令和五年八月二十三日(水))
令和五年八月二十四日(木)

三 令和六年度開催地

沖縄県(発表割当 第一・四・六分科会)

第七十四回 全日中大分大会

一 大会主題

「新たな時代を切り拓き よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」

二期日

令和五年十月二十六日(木))
令和五年十月二十七日(金)

三 令和六年度開催地

岩手県(発表なし)
※ 全日中大分大会は全九中大分大会と兼ねて開催されます。

第七十四回 全九中大分大会

一 大会主題

「新たな時代を切り拓き よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」

二期日

令和五年十月二十六日(木))
令和五年十月二十七日(金)

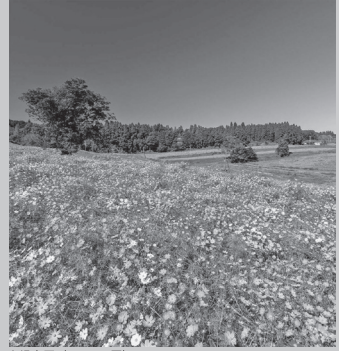
三 令和六年度開催地

宮崎県(発表割当 第四分科会)

■ 全国及び九州地区の大会形式について、変更等がある場合は、その都度連絡します。

笑顔になることで自分も 幸せになる。

笑顔には自分だけでなく
周りにも幸福感
がつながるといふ笑顔の
もたらす効果がある。



上場高原（コスモス園）

© K.P.V.B

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



一般財団法人校長会館だより

定例の理事会と評議員会が開催されました。

○第33回理事会（六月六日）

- ・令和四年度 決算並びに公益目的支出計画
・実施報告書について承認された。

○第25回評議員会（六月七日）

- ・令和四年度公益目的支出計画・実施報告書
について報告を受けるとともに、当該年度
末の賃借対照表について審議がなされ、承
認された。

○第34回理事会（六月七日）

- ・新理事長、副理事長を選任し、組織の体制
を整えた。

教育長異動

○再任 令和五年六月十一日付

日置市 奥 善一 氏

季節の言葉 「水無月」

戸口から 青水無月の 月夜哉

小林一茶

「無」は「の」を意味し、田に水を引く
水の月の意とされています。

編集

後記



先日、同僚の結婚披露宴でスピーチをする機会に恵まれた。二百人を超える参列者でその緊張感たるや相当なものであった。相手側主賓代表の祝辞は司会者とも事前に打ち合わせをしていたよう爆笑につぐ爆笑。ますますやりにくいと感じた。そして自分の番。なんとか少々の笑いもとれて無事に終えることができた。ほっとしてお酒を飲みながらゆっくりしているところへ、同じテーブルにいた友人がやってきた。そしてこれからはスピーチもチャットGPTの時代になるだろうという話題になった。

教育現場でのチャットGPTの使用の是非が議論されている。この「鹿児島の教育」も例えば「校長」「講話」とキーワードを入力すれば「ある日の校長講話」の原稿をあっという間に仕上げてくれるなんて時代がきている。情報通信技術はあくまでも道具であり、それに意味や価値を与えるのも当然人間であるという見方が果たして今後も維持し得るのであるのか。校正作業をしている我々もAIが作成した文章と生身の人間が書いた文章をどこまで見抜けるのであるのか。チャットGPTが普及すれば、学びの在り方や希求する知は変容するに違いない。ますます大変な時代になってきたと感じる。そんな時代にあって自分の言葉で今月号も貴重な玉稿を御寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。

長崎伸一（南中学校）